山の断想

串田孫一

大和書房

山の断想

1966年5月20日　第1刷発行
1967年2月28日　第15刷発行

定価 420円

著者　串田孫一
編者　小海永二
発行者　大和岩雄

発行所　大和書房（だいわ）
東京都文京区関口1-33
振替東京 64227
電話 (203) 4511～4
製版・印刷・東洋印刷　製本・秋田製本

落丁本・乱丁本はお取替えします　〈検印略〉© 1966

目　次

山上の想い　人は何故山へ登るのだろう……三
山の悦び　アンナプルナへ登ったモーリス・エルゾーグは……二九
山頂の歌　二月の山は初冬や春先と……一三五
山小屋の夜　やっといい場所があった、早く登っておいで……八一
緑の谷　ある凹面谷の生活。私は夏の終るまで……一〇七
夢の牧場　高原は太陽が遊び、その光が……一三五
ひとりの森　森にはそれぞれが人を圧する大木が集っている…一三三

山の友だち　山にすんで、そこで花を咲かせたり……一六九
はるかなる山　私は独りで薪を燃やしていた……二〇一
郷愁列車　もう十年も前のことになる……二一九
解説　……小海永二……二三六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山上の想い

人は何故山へ登るのだろう。何故好んで、氷の岩尾根を登って行こうとするのだろう。この自ら悦んで求める忍苦の行為を人が棄てないうちは、私は人間の尊いねがいを疑わないだろう。

❋

私は何故、好んで雪と氷の岩尾根や岩壁を攀じるのだろうか。一歩一歩の疲労が、ただ白いあやしい夢を産んで行くような、そんな雪の深い斜面を押し進み、やっとのことで辿りついた凍る岩壁に、根気よく、いよいよ力を入れて足場を切る。そして時にはもうこの一つの力のかたまりをいさぎよく投げ棄てることで、自分の力はすっかり尽きるような思いさえして、夢中で這い上ったその岩峯の頂は、とうてい息もつけない程の横なぐりの雪と風だ。

若い日の、数々のこうした登高には、幾分勇壮なたたかいの気分がなくもなく、その末には、征服の熱い歓喜もこみあげて来た。今ここに立つことの出来た自分を、誇らしく飾るために、頬に突きささるような強風がうれしかった。しかし今は、私の山での行為に、秘かな理由をつけずにいられなくなった。たとえそれが他人には通じかねても、自分だけには納得のゆく

ような、そういう秘めた理由を。

❋

当然のこととは言え、思うように色彩られなかった私の過去は既に重く、また重きが故に私は振りかえる。遙かなる夕映えの中に、もう希望のみの踊る幻影は見つけにくく、ただそこには去って行ったものの空しさと、それを眺めようとする悲しい追憶があるばかりだ。

私はそれではいけないことを知っている。あの氷の山頂に立って、私はただ振りかえることを奪われた一つの動物のように、前に向って力いっぱい踏張っていたい。よろめく私をささえるものは私以外にないことを知っている筈ではないか。

遠く続く、確かにこの足許から続く純白の山なみや雪原に、私の未来の起伏を感じよう。それは私にとって、今を遅らせればもう再び訪れることのない孤独な洗礼である。

神のない、孤独な洗礼。鋭い針のように痛い風と雪との試錬のあとに、自ら迎える洗礼である。

その洗礼の行われる殿堂は、天へ向って清らかな祈願をかたどってそびえるこの冬の岩山であるが、私自身の心の中にも、同じ清浄な願いを芳香のように宿す壮麗な殿堂が築かれるだろう。

❋

氷の岩峯

深い雪を夢心地で押し進み
凍る岩壁に根気よく足場を作り
力学的に曖昧を許さぬ登行を続けて
やっと辿りついた岩峯は
息もつけない横なぐりの風だ
私たちは互いに綱をたぐり寄せたが
怖い顔して交わす言葉もなく
力いっぱい踏張っているだけだ
私たちの努力はたたかいでもなく
征服でもなかったことを頻りに考える
思うように色彩られなかった過去と
遠く続く雪原のような

ただ純白な起伏である未来との間に立って
孤独な洗礼をめいめい経験しながら
壮麗な殿堂を心の中に築いている

❋

山には痛快な征服の喜びもある。自分にも登れたという誇りも味わえる。空気がそこではぴんと張っていてふるえるような快感もあるだろう。だが、それよりもさらに大きなことは、自分という人間を、むき出しの非情の自然の中へ置いて確かめることである。

❋

山の中で人は蟻のようになる。大木の幹が蟻が登ってもじっとしているように、山は人が登ることによって表情をかえない。

山の赤い肌は、太古からその色をしていたように私たちの前にある。人は山で小さなものになり始める。儚いものになり始める。

広い高原を黙って歩いて行く時、人は牛のようにもなる。私たちは蟻のようになり、牛のようになって大きな解放を知る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

このものやわらかな興奮をもう一度味わうために、山へ向う。

❋

山はどんなに低いものであっても、それが山の名に値しないものであっても、それなりに姿は大きく、私を抱く力は強い。

❋

鞍部はたのしい。それが狭ければ狭いほど。

❋

自分の力の限度を超えた登攀に成功した時、私は秘かに、山での生活を変えようと思った。そういう時には落石の音がこたえる。

❋

山上の想い。一体そこで私に限らず、人々は想いらしい想いを抱くことがあるのだろうか。大きな風景がのしかかり、下からのしあげ、私を静かな混乱におとし入れようとする時、それ

らの風物から自分の内部を守るために、遙かな天を見たり、仰向けに臥たりしてみるが、山上で想念を整えることは決して易しいことではない。それは多くの場合、雲の去来のように自分のものとは言えないようなところを通り過ぎて行くに過ぎない。

想念と言うよりは、それは幻影に近い。雲や霧の中に、私の姿が夢の中の見知らぬ人のようにうつる、あの影に似ている。山上の想いというものは影である。

❋

私は山の持っている美徳、その美しい内面的な力を、ただ人間の呼びならわしている名称では指摘しにくい。何故なら、寛容と言うにしてはあまりに重みがありすぎ、勇気と言うにしてはあまりに静かなものでありすぎる。私たちは山が荒れるとか、時には山が怒ると言うが、烈風の音高く、山のすべてが恐るべき色と音とに包まれている時、山はむしろ沈着に、むしろ優れた深い美しさにその存在を主張する。荒れ廻っているのは風であり、乱れた雲であり、それにもてあそばれている雨や雪である。その中で、山は独り冷く沈みながら、いよいよその重みのある姿によって存在を主張し続ける。それは時には、というよりも多くの場合、私たちの眼からは見えない。しかし、その風と雨との荒れ狂う中で、草木のさわぐその中で、山は独り不動の姿勢をとっている。

この私たちが、意志や、抵抗や、その他の言葉をもってしても表わすことの出来ない姿勢は、私たちの羨望からは遙かに遠く、またそこから学ぼうとする謙虚な心にも無関心に、しかも今私の目の前に輝いている。

※

たった一人で山を歩くと言うことは格別の味があり、私は昔から好きだ。独特の印象が残る。私の過去に出かけた山の中から、単独で歩いた時の記憶をあつめればかなりになる。三、四人で一緒に行った時でも、途中から許して貰って独りになったこともずいぶんある。

山の頂に独り残って、友人が下って行く後姿をいつまでも見送っていたり、尾根の途中から私だけが谷へ下って行ったりする時、私は、独りになることを悦ぶ気持を露骨に見せはしないが、ほんの少しばかりヒロイックになることがまあうれしくて、それで仲間の気持を悪くしない程度にこんな別れを楽しんだことも多い。

独りの山旅は無論寂しいことであって、その旅が長ければ、何日も口をきかずにいることになるし、痩尾根などで径がはっきりしない時や、急に谷から霧が吹きあげて来て、私を盲目同様にしてしまう時などは、それは何と言っても心細い。けれども、その寂しさ、心細さの中で、大きな山から受ける試錬はずいぶん貴いものがある。

私はそういう意味で、気持をよく知り合った仲間で山へ出かける楽しさを、否定しはしないが、独りの山旅を若い人たちがもっとするようになればいいと思う。私の今の場合は何と言っても体力が衰えかけているので、勝手気儘をしたいと言う理由もはっきりしているが、その自由のかげに、当然強い緊張が伴っている。

❋

実を言えば、山での行為は、この緊張感こそ貴いのであって、それは何よりも独りの時には最も切実に用意されるからである。この単独行を無条件にすすめることは慎まなければならない。無謀に行われれば、危険は大きいに決っている。目的の山に関する知識をあらかじめ充分に持っていなければならないことは言うまでもないが、分担して携行することの出来ないその荷物も大きくなるだろう。

しかし準備に怠りがなければ、独りの山旅の経験は、精神的にきたえられることが極めて多くまた大きい筈である。独りでした野宿の経験などは、たとえそれが大して高くない山の雑木林の中でのことであろうと、深い谷を足もとに見下ろす岩壁のテラスでのことであろうと、自分の生きる強さをはっきりと分らせてもくれるし、そこで得た自信は、人生の中での実に多様の苦しみを、怖がらずに迎える心構えにもなるだろう。

❋

山では快晴のたのしい日ばかりはない。風や雨のはげしい日に、不注意からではなく、止むを得ず危険な道や、道のないところを歩かなければならないこともある。それは山へ行くすべての人々が、覚悟の上での山から受ける試錬である。それはまた日常の生活にどれほど大きな教えをもたらすことになるかわからない。しかし、一足飛びに運にまかせて専門家になろうとするのは、山では滑稽な冒険で、山を愛することからは遙かに遠い行為である。

❋

私は山での行為というものを単純には考えない。そこは自由であり、親しい仲間同志で何でも気がねなく歌もうたえるし、勝手な話も出来るように思っている人がいるかも知れないが、その気ままが思う存分に許されることは滅多にない。思えば当り前のことかも知れないが、神経が細かにふるえ始めたら、山での行為ほどむずかしいものはない。急に自分の動揺や戦慄をかくそうとしても、それが出来なくなる。

このことを考えると、山での行為でなくとも、自分を、何にはばかることなくさらけ出していられる自由というものは、そう滅多に得られるものではなく、たとえいい仲間があっても、

それはやはりある一定の条件の中だけのことだということが意外に多いような気がする。

❋

私は独りだった日の山を回想する。多くの場合、独りだった時に、私は自分を相手に余計お喋りになった。独りになると、昔はセッセと歩いた。休むことの、つまり山の中に動かずにいることの、本当のたのしみを知らずにいたようだ。山頂に辿りついても、何かしらそわそわとそこへゆっくり腰を下ろしていることを余りしなかった。私は自分をせき立てていた。

今はそうしない。気儘になることを一歩一歩戒めながら、あそこまでは、あそこまではと言いきかせながら登り、山頂にいる時間の多すぎることを、帰って来てその記録の手帳の中にはっきり発見する。まるで私の外観を見ているものがいるとしたら、その人は、私が歳とともに大胆になって行くとでも思いそうなくらいだ。しかしそれはあり得ないことである。

山での静かな、一種のうずくまりを求める気持が強くなって来たのだと言ったらいいのだろうか。気が楽で、独りである不安を感じることの前に、別な方面から悠然として眠り、そこに眠り込むことを悦びとさえしようとする。

❋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com